

時間的展望に関する研究 (1)

—非行少年の時間的展望について—

杉 山 成・神 田 信 彦

問 題

時間的展望 (time perspective) とは、そのとき、そのときにおいて個人が未来というものをどのように見、経験しているのか、また過去についてどういう見方をしているのか、それらの総体である (Lewin 1951)。この方面の研究は古く、Lewin, K. (1942) は場の理論の中で時間的展望を、生活空間を成り立たせている重要な一面として位置づけ、個人の生活空間が現在だけでなく、未来や過去をもその中に含んでいると考えた。そして集団や個人のモラル、粘り強さ、要求水準 (目標設定)、およびリーダーシップなどが時間的展望のあり方と強く関係していることを指摘している。その後1950年代に入って時間的展望の構造や意味を明らかにしようとする実証的な研究が多くなされるようになった。例えば、人生満足度との関係 (Lessing 1972)、学業成績との関係 (Teahan 1958)、Locus of control との関係 (Platt & Eisenman 1968)、精神病との関係 (Wallace 1956) など、その領域は多岐にわたっている。

都築 (1982) はこうした従来の研究を展望して、時間的展望の研究領域のなかには認知的な側面としての狭義の Time Perspective と、情緒的な意味での time orientation や time attitude が含まれるということを指摘している。認知的側面とは個人が自己の過去や未来にどのような出来事を想起あるいは予想するかということに関する側面であり、extension (概念化された未来の時間的範囲の長さ)、density (個人が未来に予想する出来事や、経験の数)、coherence (概念化された未来の

中における組織化の程度)、direction (過去、現在、未来の三つの時間的領域の中で、どの領域に対する志向性が強いのかということ) などの概念によってとらえられる)。一方の情緒的側面というのは個人が自己の過去や未来に対してどのような感情を持っているか、ということの問題にする。これに属するのは time relatedness (過去、現在、未来がどの程度関連性をもってとらえられ、かつ統合されているか)、directionality (現在の瞬間から未来へと移行する感覚)、time attitude (時間に対する不安、評価など)、personal time perspective (現在と過去、現在と未来との間の主観的評価の差) といった概念である。こうした時間的展望の各側面の相互的な関連性は、因子分析的な研究によって議論されているが一致した見解は得られていない。

ところで、青年期は時間的展望の発達が著しい時期である。人生のうちの他のどの時期よりも、この時間的展望が重要な役割を演じており、青年個人または青年集団の行動や態度は時間的展望のあり方に強く影響されていると考えられる。それゆえ、青年期の不適応行動の一つである非行性について時間的展望との関係が注目されてきた。

Barndt & Johnson (1955) は、自由に物語を作らせる物語完成法 (story-completion technique) を少年院に収容されている26名の非行少年に行い、正常少年 (無非行少年) と比較した。報告された物語の中に包含された時間の長さによって得点化した結果、非行少年の構成した物語は正常少年のものよりも未来の extension が有意に

短いことが示された。また Davids, Kidder & Reich (1962) は男子のみではなく女子をも加えて同様の追試を行い、非行少年は性別に関係なく正常少年よりも現在志向的であることを報告している。正常少年達は、より未来志向的であった。同様の結果は Siegman (1961) によっても得られている。

一方、小宮山・星・高橋および川田 (1976) は、非行少年の時間的な次元に関する情緒的な側面を質問紙調査によって調査した。対象は家庭裁判所で保護観察の処分が下された高校生と有職少年、および対照群 (非行歴のない高校生と有職少年) であった。結果として高校生については非行群に「卒業後の予定の不明確さ」、「未来の希望のなさ」等のネガティブな時間的展望が多くみられる一方、「未来の展望の明るさ」においては、正常少年よりもポジティブな時間的展望がみられた。有職少年では非行群と正常少年の群との間に有意差の認められたものは「未来の幸福感」、「未来の希望」、「将来の生活目標」、「未来展望の明るさ」、「未来の楽観性」等であり、前三者は正常少年の特徴で、その他は非行少年の特徴であった。このように高校生群、有職少年群を問わず、非行少年は将来の具体的な展望においては暗いにも関わらず、全体的には明るくみるという傾向をしめしている。勝俣・篠原および村上 (1982) が、少年鑑別所に収容された非行少年群と非行歴のない男子高校生からなる対照群に対して質問紙調査を実施した結果においても、非行少年は両面価値的な時間的展望を示した。非行少年は過去、現在および未来の時間的次元に対して不快感や不安を抱いているにも関わらず、未来に対しては楽観的でもあったのである。

このように、非行少年には未来における賞罰には無関心で「今ここ」という現在のみ縛られている、extension の短い時間的展望がみられ、また情緒的には未来に対して全体的には楽観的な態度を持っているという傾向が多くみられる。こうした傾向を生み出している原因についてはほとん

ど研究されていないが、勝俣・篠原および村上 (1982) は、非行少年の時間的な連続性 (time relatedness) の認知というものに注目し、彼らは現在や過去から切り放して未来を見ているのではないかと考察している。すなわち、現在の行動 (努力) が未来の達成に結びつくということについての認知がないため、非行少年は未来への extension の長い時間的展望を持たず、したがって刹那的・現在志向的な時間的展望の性質を示してしまうのではないだろうか、ということである。そこで本研究では時間的な連続性の認知に主眼点を置き、非行少年の時間的展望と正常少年の時間的展望との比較を行うこととする。

目 的

時間的展望のスケールにより、現在・過去・未来の時間的次元に対する評価、および過去と現在と未来の間の時間的な連続性の認知における非行少年の特徴について検討する。

方 法

(1) 調査対象者

非行少年の群については埼玉県内の教護院に入院している中学生63名 (男子54名, 女子9名), 対照群の正常少年は東京都内の市立中学の1~3年生284名 (男子140名, 女子144名) である。

(2) 調査時期と実施方法

調査は1991年12月上旬~下旬に非行少年, 正常少年とも授業中に実施した。

(3) 時間的展望スケール

今回作成した時間的展望を測定するスケールは、3つの時間次元 (過去・現在・未来) それぞれに対する評価 (time evaluation), 志向性 (time orientation), 時間的な連続性 (time relatedness) の認知に関する項目、そしてその他の項目から成る14項目である。項目の回答形式は「まったくその通り」から「まったくちがう」までの5段階評定尺度法を採用し、それぞれの応答に対して5点から1点までの得点を与える。

結 果

(1) 時間的展望スケールによる判別分析

非行少年と正常少年の時間的展望に差異があるのであれば、時間的展望のスケールに対する反応によって非行少年と正常少年とを判別できるであろう。そこで今回使用したスケールへの反応（量的データ）を独立変数、非行少年か正常少年か（質的データ）を従属変数として判別分析を行った。その結果が Table.1 である。判別分析はまず線形判別関数を導出し、その関数によって 2 群の判別を行う。（独立変数の投入は一括投入方式）この判別関数は 0.1 % 水準で従属変数を有意に説明するものであった。

Table.1 判別の的中状況

| | | 判 別 結 果 | | 計 |
|------------------|------|----------------|---------------|-----------------|
| | | 正常少年 | 非行少年 | |
| 実 際 の 群 | 正常少年 | 207人 (72.9) | 77人 (27.1) | 284人 (100.0) |
| | 非行少年 | 16人 (25.8) | 47人 (74.2) | 63人 (100.0) |

() 内%

また、独立変数による従属変数の説明が実質的に意味のあるものであったかどうかは、判別の的中率を検討すれば明らかになる。今回の分析では的中率は Table.1 のとおりであった。表側は実際の従属変数の値（群）を表し、表頭は予測の結果を表す。判別の的中率、つまり予測と実際の群が一致した比率は、非行少年で 74.2 %、正常少年で 72.9 % であり、全体では 73.1 % であった。項目数やサンプルの数を考慮すると、今回使用した時間的展望のスケールが非行少年と正常少年とを判別する力は比較的高いといえるであろう。

(2) 時間的展望スケール各項目の平均値の検定

時間的展望スケール各項目における非行少年と正常少年それぞれの平均値を *t* 検定したのが Table. 2 である。それぞれの時間的次元における評価について、過去の評価（項目 7 「これまであまりいいことがなかった」）、現在の評価（項目 1 「毎日が楽しい」）についてはそれぞれ正常少年群の方がポジティブな内容であり、（どちらも 5 % 水準で有意）一方、未来の評価（項目 13 「自分の将来の見通しは明るい」）については有意差はないものの非行群の方がポジティブな傾向を示している。

Table. 2 各項目の群別平均値

| 項 目 | 正 常 | 非 行 | <i>t</i> 値 |
|---------------------------|-------------|-------------|------------|
| 1 毎日が楽しい | 3.56 (1.16) | 3.27 (0.96) | 2.06* |
| 2 ちょっとしたこと、未来に希望がもてなくなる | 2.57 (1.25) | 2.63 (1.33) | 0.75 |
| 3 一日、一日が長い | 2.40 (1.29) | 2.48 (1.45) | 0.67 |
| 4 小学生の頃のことをよく思い出す | 3.13 (1.33) | 3.16 (1.41) | 0.86 |
| 5 自分の目標のために努力している | 3.20 (1.20) | 3.77 (1.09) | 3.65*** |
| 6 自分の今やっていることが、自分の将来に影響する | 3.38 (1.18) | 3.60 (1.37) | 1.17 |
| 7 これまであまりいいことがなかった | 2.70 (1.19) | 3.13 (1.34) | 2.32* |
| 8 はやく大人になりたい | 2.86 (1.36) | 3.77 (1.35) | 4.82*** |
| 9 小さいときに頑張ったことが、今、役に立っている | 3.02 (1.20) | 2.85 (1.37) | 0.37 |
| 10 不満なことがたくさんある | 3.27 (1.33) | 3.10 (1.26) | 0.33 |
| 11 もう一度小さい頃に戻ってやり直したい | 3.35 (1.41) | 4.08 (1.31) | 3.93*** |
| 12 実現しそうもないことばかり考える | 3.42 (1.26) | 3.26 (1.21) | 0.36 |
| 13 自分の将来の見通しは明るい | 2.86 (0.99) | 3.02 (1.10) | 1.00 |
| 14 1996年はずいぶん先のことだ | 2.84 (1.31) | 3.00 (1.43) | 0.44 |

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

() 内 標準偏差

また、未来への志向性を問う項目は項目5（「自分の目標のために努力している」）と項目8（「はやく大人になりたい」）であるが、これらの項目でも非行少年の方が平均値が有意に高く（0.1%水準）非行少年の未来への強い志向性というものを示している。ところが「ちょっとしたことで未来に希望が持たなくなる」という項目2にも非行少年は有意に高く肯定しており、非行少年の未来志向は正常少年群よりも強いものであるが、同時に不安定なものでもあるということがうかがえる。そしてさらに過去への志向を示すだろう項目11（「もう一度小さい頃に戻ってやり直したい」）に関して非行少年は有意に高く反応しており、非行少年の時間的志向性が未来と過去の両方向に延びているものだということが示唆される。

今回の主眼点である時間的な連続性に関する項目の結果としては、過去の経験が今の自分を形成しているという意識を問う項目9（「小さいときに頑張ったことが今、役に立っている」）では正常少年の方が高く、一方、現在と未来の連続性を問う項目6（「自分の今やっていることが自分の将来に影響する」）では逆に非行少年の方が得点が高かった。しかしどちらの項目にも両群間に有意な差はない。

(3) 各時間的次元の評価間の相関

次に非行少年における各時間次元の評価と時間的連続性との関連性について検討するため、非行少年、正常少年別に項目間の Pearson 積率相関係数を求めた。Fig. 1 はその結果を図式化したものである。Fig. 1 における「未来の評価」には項目13、「現在の評価」には項目1をそのまま使用し、「過去の評価」には項目7の得点を逆転させて採用した。また、時間的な連続性に関する概念として「過去の努力が報われた経験」には項目9、「現在と未来の連続性」には項目6を採用する。そして未来への働きかけの指標として「努力」というものを想定し、項目5を使用した。Fig. 1 には相関係数の絶対値が0.15以上のものだけ記載し、0.3以上のものを太線で示した。

Fig. 1 にもとづいて各時間次元の評価と時間的連続性との関連をみても、まずは「過去の努力が報われた経験」と各時間次元の評価との関連が正常少年と非行少年との間で異なっていることが注目される。正常少年にとっては「過去の努力が報われた経験」は過去はもちろん現在や未来の評価とも関連があるのに、非行少年にとってはどの時間的次元とも関連を持たないのである。また非行少年においては現在の評価が過去の評価と結びついておらず、現在の評価と未来の評価との関係についても、正常少年が高いのに対し、非行少年においてはかなり低いものとなっている。このように非行少年においては、各時間次元の評価が正常少年よりもかなり低い関連しか持っていない傾向がみられる。

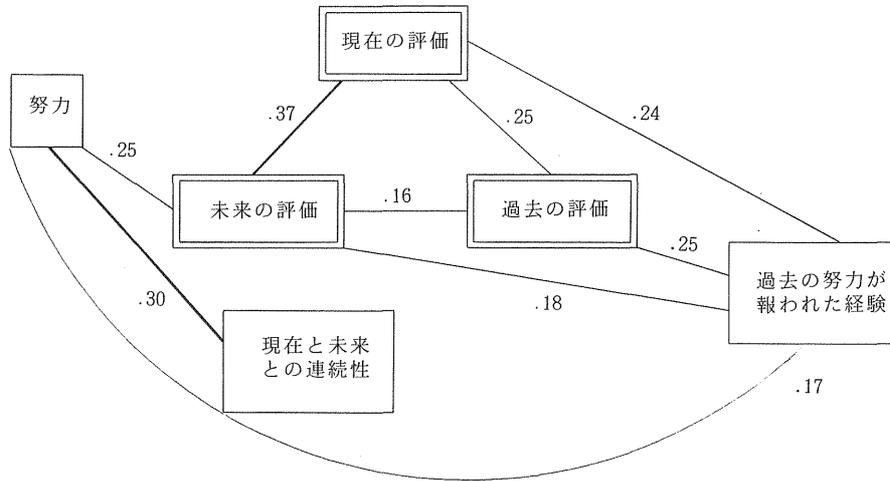
考 察

各時間次元の評価に関して、非行少年は現在や過去については正常少年よりもネガティブな傾向を示したが、未来の評価については逆にポジティブな傾向を示した。全体的な未来の評価についての非行少年の楽観性については、既に小宮山ら（1976）によって報告されており、現在と未来との時間的な連続性の認知との関係が考えられた。そこで「自分の今やっていることが自分の将来に影響する」という項目を設定したのだが、現在と未来の時間的な連続性の認知に関しては両群に有意な差がなく、傾向的には非行少年の方が高かった。これは勝俣・篠原および村上（1982）と反する傾向である。また「自分の目標のために努力している」や「早く大人になりたい」という非行少年の未来志向性は正常少年よりも高いものであったが、これも、非行少年は現在志向的で未来の賞罰には関心がない、という Davids, Kidder & Reich（1962）をはじめとする多くの先行研究と矛盾する結果である。

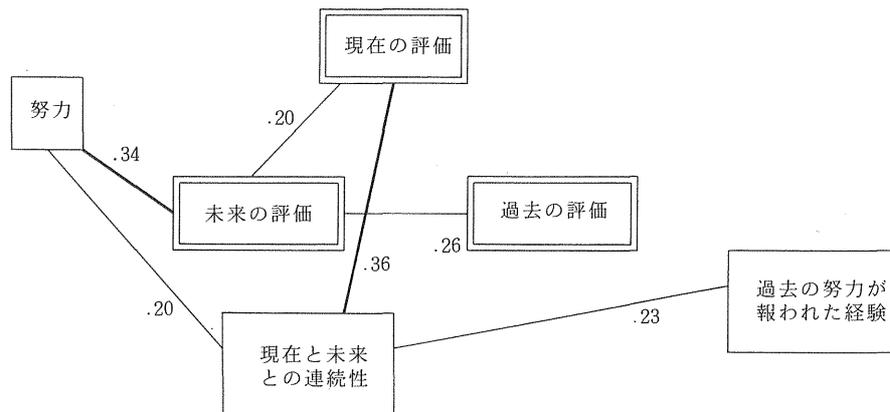
それでは本研究の非行少年はなぜ正常少年よりも現在と未来との連続性を認知していると答え、未来に対する高い志向性を示したのであろうか。

Fig. 1 各時間次元の評価と時間的連続性との相関

1. 正常少年 (N= 284)



2. 非行少年 (N= 63)



まず一つの原因として、今回の質問紙の性質が挙げられる。

すなわち今回の質問項目のうち、「自分の目標のために努力している」や「自分の今やっていることが自分の将来に影響する」という項目はかなり規範的な内容を含んでおり、そういった項目に非行少年たちが規範的に回答したという可能性が考えられるのである。麦島(1976)は、非行少年は善悪の判断をする場合に既存の大人社会の論理を当てはめる傾向があることを指摘しているが、本研究では非行少年たちの場合、さらに教護院に入院しており、他者の監視を受けているという状況にある。そのため彼らの回答には社会的に望ましいと思われる方向にバイアスがかけられたのでは

ないだろうか。

また彼らは確かに非行歴を持つ少年達なのだが、現在は非行を行っていた環境から離れて矯正の教育を受けている。その事実からは教護院における矯正教育の効果というものも考えられるだろう。非行少年の時間的展望が固定的なものではなく、カウンセリング等の介入によって変化させるものであるということは、非行少年の短い未来のextensionに対してカウンセリングによる介入を試みた Ricks, Umbarger & Mark (1964) によって示されている。彼らは非行少年を2群に分け、実験群には11ヶ月間の職業セラピーを行い、その間何も行わなかった対照群と比較した。結果としてカウンセリングの効果が認められ、非行少年の時間

的展望は長くなったと彼らは報告している。本研究での非行少年も矯正教育の効果で未来に目を向けるように変化したのかも知れない。この考えは非行経験の有無のほかに施設収容の期間も変数として考慮する必要があるということを示唆するものである。ただし厳密には、Ricksら(1964)の対象は extension であって、本研究での時間的志向性と同次元に扱うことはできないかもしれない。それゆえ、この点について立証するには今後の研究を待たなくてはならないであろう。

次に非行少年における各時間次元の評価と時間的連続性との関連性について検討するため、非行少年、正常少年別に項目間の Pearson 積率相関係数を求めた。その結果、正常少年においては「過去の努力が報われた経験」が各時間次元の評価や現在の努力と関連を持っており、一方、非行少年においてはそれはどの時間次元とも関連を持っていなかった。また Table. 2 にみられるように両群の平均値の検定の際には非行少年の群の方が「もう一度小さい頃に戻ってやり直したい」という、過去との断絶の上に新生を期待する傾向が強かった。これらの結果は正常少年と非行少年それぞれにとっての「過去」の持つ意味の違いを示しているものとして捉えられよう。個人の行動における認知的な過程を重視する研究の分野では、過去の努力が報われた経験は、個人の主観的な統制感(perceived control)を養成し、高めるものとされている。主観的統制感とは、自分が望んだとき(その気になったとき)に自分の欲する結果が得られる可能性についての期待(樋口・鎌原・大塚 1983)である。過去に環境をコントロールできた経験をしていると、個人は統制感の信念を高め、未来の成果獲得を目指して現在の行動を律することができる。もしも統制不可能事態に陥ったとしても、すぐに主観的統制感を失うことはない。ところが主観的統制感が未獲得であったり、弱いものであったために統制不可能事態で喪失してしまった場合には、未来の成果獲得を望めず、計画性のない不適応行動に陥ってしまうであろう。このように正常

少年にとっての過去は、現在の自分を確立した、自分の行動の基準としての意味を持っているのだが、非行少年にとっての過去は、未来の自分に対するポジティブな意味を持たないということが考えられる。そのため非行少年達は、過去に立脚した現在の評価や、現在に基づいた未来展望を持つことができずに、過去や現在からの時間的連続性の断絶の上に明るい未来を想定するのであろう。項目 2 に対する反応からは非行少年の未来展望が不安定なものであるということが読み取れるが、その不安定さもここに原因があるのではなかろうか。

登校拒否児の時間的展望について検討した真仁田(1990)は、登校拒否児における自他の過去に対する受け入れの不足ということについて指摘し、「過去」を過去として受け入れられるように働きかける(過去に対する意味の再発見の仕事)のがカウンセラーの役割だと述べている。本研究の結果から見る限り、非行少年にも同様のことがいえるであろう。

〔付記〕

本論文を作成するにあたり、御指導頂きました立教大学一般教育部教授水口禮治先生に深く感謝いたします。

引用文献

- Barndt, R. J., & Johnson, D. M. 1955 Time orientation in delinquents. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 343-345.
- Davids, A., Kidder, C., & Reich, M. 1962 Time orientation in male and female juvenile delinquents. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64, 239-240.
- 樋口一辰・鎌田雅彦・大塚雄作 1983 児童の学業達成に関する原因帰属モデルの検討 教育心理学研究, 31, 18-27.
- 勝俣暎史・篠原弘章・村上みどり 1982 非行少年の時間的展望 熊本大学教育学部紀要, 31, 267-277.

- 小宮山要・星悦子・高橋和雄・川田三夫 1976
非行少年の生活意識に関する研究 科学警察研
究所報告, 防犯少年編 17, 83-93.
- Lessing, E. E. 1972 Extension of personal future
time perspective, age, and life satisfaction of
children and adolescents. *Developmental Psy-*
chology, 6, 457-468.
- Lewin, K. 1942 *Time perspective and morale.*
New York : Houghton Mifflin.
- Lewin, K. 1951 *Field theory and social science.*
New York : Harper.
- 真仁田昭 1990 登校拒否児に流れる「時間」
—登校拒否と時間との関わり— 児童心理
第44 卷8号, 3-10.
- 麦島文夫 1976 非行化過程の追跡研究 —非・
非行化要因としての挑戦的態度— 科学警察研
究所報告, 防犯少年編, 17, 83-93.
- Platt, J. J., & Eisenman, R. 1968 Internal-exte-
rnal control of reinforcement, time perspec-
tive, adjustment, and anxiety. *Journal of*
Genetic Psychology, 79, 121-128.
- Ricks, D., Umbarger, C., & Mark, R. 1964
A measure of increased temporal perspective
in successfully treated adolescent delinquent
boys. *Journal of Abnormal and Social Psy-*
chology, 69, 685-689.
- Siegman, A. W. 1961 The relationships between
future time perspective, time estimation, and
impulse control in a group of young offenders
and in a control group. *Journal of Counseling*
Psychology, 25, 470-475.
- Teahan, J. E. 1958 Future time perspective, op-
timism, and academic achievement. *Journal*
of Abnormal and Social Psychology, 57, 379-
380.
- 都築学 1982 時間的展望に関する文献的研究
教育心理学研究, 30, 73-86
- Wallace, M. 1956 Future time perspective in
schizophrenia. *Journal of Abnormal and so-*
cial Psychology, 52, 240-245